

## 采女氏塋域碑考

三 谷 芳 幸

はじめに

采女氏塋域碑は、七、八世紀の墓制や土地制度にかかわる史料として比較的言及される機会の多い金石文である。ところが、その釈文にはいまだに見解の一致しない部分があり、そのために内容に深く立ち入った利用がためらわれる状況にある。そこで本稿では、釈文の問題部分に検討を加え、当碑の史料の意義についても考えてみたいと思う。

### 一 真拓オリジナルの出現

采女氏塋域碑は、河内国石川郡春日村（現在の大阪府南河内郡太子町春日）の帷子山（カタビラヤマ）から掘り出されて付近の妙見寺境内に置かれていたが、いまではその原碑は失われ、わずかに江戸時代以降の拓本や記録によって碑文・碑形が伝えられるのみになっている。

狩谷掖斎の『古京遺文』によれば、その碑文は以下のようなものである。

飛鳥浄原大朝廷大弁

官直大貳采女竹良卿所

請造墓所形浦山地四千

代他人莫上毀木犯穢

傍地也

己丑年十二月廿五日

（飛鳥浄原大朝廷の大弁官、直大貳、采女竹良卿請け造る所の墓所、

形浦山地の地四千代、他人上りて木を毀ち、傍地を犯し穢すこと莫れ。

己丑年十二月廿五日。）

飛鳥浄原大朝廷（天武朝）の大弁官で直大貳の冠位をもつ采女竹良が、形浦山の地四千代をもらいうけて墓所を造ったので、他人はそこに上つて木を伐つたり周辺の地を穢したりしてはならない、という内容の文面が、持統三（六八九）年十二月二十五日の日付で、六行にわ

たつて陰刻されている。これは内容からみて、故人の業績をたたえることを主眼とするふつうの墓碑ではなく、福山敏男氏が述べられたとおり、「墓地を荒させないための立ち入り禁止の標石」というべきものである。

さて、この碑の拓本は、今世紀に入ってから、

- ① 山田孝雄・香取秀真増補『古京遺文』（宝文館、一九二二年）
- ② 木崎愛吉『撰河泉金石文』（宗徳書院、一九一四年）
- ③ 日本古典全集（狩谷棧齋全集第九）『古京遺文』（日本古典全集刊行会、一九二八年）

- ④ 『書道全集 九』（平凡社、一九三〇年）

- ⑤ 齋藤忠編著『古代朝鮮・日本金石文資料集成』（吉川弘文館、一九八三年）

といった金石文関係の資料集に掲載されてきたが、近江昌司氏はこのうちの①②③の拓本について調べられ、①は木製彫版による摺本、②は博製模版の拓本で、真拓は③の拓本（江戸後期の蘭方医、三浦蘭坂の手拓）のみであること（しかも、そのオリジナルは現在所在がわからなくなっていること）を明らかにされた。そのほか④にはふたつの拓本が載せられているが、ひとつは②と同じ模拓、ひとつは③と同系統のものらしい真拓であり、また⑤に載せられているのは①と同じ摺本である。なお、①は一九六八年に勉強社文庫の一冊として復刊されたが、そのさい拓本の図版は③所載の真拓に改められている。采女氏塋域碑の研究は、つい最近まで、このようなオリジナルの現存しない真拓や模拓や摺本に依拠して行われていたのである。

ところが、一〇年ほどまえに、静岡県の藤江喜重氏宅に所蔵されていた小杉楓邨旧蔵文書のなかから江戸時代のものと思われる真拓のオ

リジナルが発見され、当碑の研究にまったく新しい資料が追加されることになった。近江氏によって③以前のものと判定されたこの真拓は、現在静岡県立美術館の所蔵になっており、われわれは同館刊行の『藤江家旧蔵小杉文庫名品抄』によってその鮮明な写真を目にすることができる。この真拓オリジナルの紹介により、当碑が高さ五三センチ、幅二五センチほどの圭首形であったことが確認される（圭首形の碑形は、『大阪府史』に紹介された藤貞幹『集古図』の書き入れの図によっても確かめられた）とともに、碑文についてもわれわれは再検討の新たな手がかりを得ることになったのである。

## 二 「四千代」か「四十代」か

当碑の碑文については、三行目の最後の文字を「千」と読むか「十」と読むかで、論者の見解が大きく分かれている。ためにしに主要な文献だけを拾ってみても、その釈文は次のようにまったく二分されている。

「千」——秋里籬島『河内名所図会』、狩谷棧齋『古京遺文』、近江昌司『采女氏塋域碑について』、岡崎敬『日本の古代金石文』、行雲龍『日本金石志』、竹内理三『寧楽遺文 下巻』

「十」——藤貞幹『好古小録』、『六種図考』、山元隱倫『尚古年表』、木崎愛吉『大日本金石史 第四卷（撰河泉金石文）』、上代文献を読む会『古京遺文注釈』、薮田嘉一郎『日本上代金石叢考』

拓本をみると、たしかに当該箇所の上部分を斜めに線が走っているが、「千」説はそれを「千」の字の第一画とみ、「十」説は「十」の字にあ

とから加わった損傷とみる。森浩一氏が述べられたように、問題の字が「十」であれば当碑の建てられた墓所は「四十代」Ⅱ〇・八段という小規模なものになり、采女竹良個人の墓である公算が高くなるが、逆に「千」であればその墓所は「四千代」Ⅱ八町もの面積をもつことになり、采女氏一族の氏墓である可能性が出てくる。この一字を「千」と読むか「十」と読むかは、当碑の解釈全体を左右するほどの重大問題なのである。

そこでまず、新出の真拓にあたつて字形そのものを検討してみる必要がある。『小杉文庫名品抄』の写真によつて、問題部分の斜め線を、同碑文中の「穢」「代」「他」「傍」にみられるノギヘン・ニンペンの第一画の斜め線と比較してみると、問題部分の斜め線はほかの斜め線のようにタテ棒の先端と接するのではなく、タテ棒ともヨコ棒とも途中で交差するかたちになっている。たしかに斜め線は「千」の字の第一画に近いところを走っているが、それが本当に「千」の字だとすれば、通常の字形とはずいぶん趣の違うものになってしまう。真拓の写真では碑面はかなり荒れていて、文字と見紛いかねないキズがあらこちらについており、問題の字についても、木崎愛吉氏が「正しく十の字にして、石面の洩せるにより、或は千の字のように見ゆるものらし」と述べられたのが、むしろ正しいように思われる。真拓の観察によるかぎり、問題の文字は「十」であるとするのが妥当であると言えるだろう。

次に、碑文の内容や建碑の環境の面からも、ひととおりの検討をしておく必要がある。まず、墓所の面積と被葬者の組み合わせとして、森氏があげられたふたつの可能性を含めて、以下の四つのケースが想定できる。

- a 采女竹良個人の墓所で四十代
- b 采女竹良個人の墓所で四十代
- c 采女氏一族の氏墓で四十代
- d 采女氏一族の氏墓で四十代

このうちdについては、同じ墓への追葬を考慮しても、四十代Ⅱ〇・八段という狭い土地に一族全体の氏墓が収まるとは考えがたいので、現実問題としてはこれを除外した三つの可能性を念頭に置いておけばよいだろう。

はじめに被葬者の問題であるが、これは碑文を素直に読むかぎり、采女竹良個人であると考えるのがもつとも自然であろう。当碑と同じような墓所の標石で、阿波国名方郡の大領粟凡直弟臣の名前を刻む阿波国造碑や、銘文中に被葬者の個人名を明記した墓誌・骨蔵器の例を考えてみても、当碑に「大弁官直大貳采女竹良卿」と明示された人物本人を、その墓所の被葬者とみるのがもつとも無理のない考え方である。また、かりに当碑の建てられた場所が采女氏全体の氏墓として確保された（その場合、竹良は氏上として采女氏全体を代表していることになる）のであれば、墓所を「造」という表現はとらないのではないかと思われる。船王後墓誌に「作墓」とあることや、小野毛人墓誌に「営造」とあることを参考にすると、ここでもやはり竹良本人のための墓が「造」られたとみる方がよいであろう。竹良本人を葬るのではなく、氏人たちの墓所をあらかじめ確保するのであれば、個々の墳墓の造作を思わせる「造」という言い方はしないのではないだろうか。このように考えると、墓所の被葬者は采女竹良個人であるともみるのがもつとも妥当であると思われる。采女竹良は『日本書紀』に「筑羅」「竹羅」などとしてみえる人物で、天武朝に遣新羅大使となり、

天武天皇の殯では直大肆の位にあつて内命婦の事を誅している。没年ははっきりしないが、持統朝に直大貳になったあと同三年までに亡くなり、当碑の建てられた形浦山の地が墓所として（竹良の遺族に）あてられたと推測されよう。被葬者についての以上の考察が正しければ、碑文の内容をめぐる可能性は、a・bのふたつにしばらくることになる。

そこで改めて「千」か「十」かが問題になるわけであるが、「四十年代」の場合、竹良個人のために八町という広大な兆域が設定されたことになり、「四十年代」の場合、〇・八段の小規模な墓所が営まれたことになる。碑文にみえる「形浦山」は、のちに帷子山（カタビヤマ）と名前を変え、現在は片原山（カタハラヤマ）と呼ばれている比高差一五～二〇メートルほどの小丘であるが、「四十年代」の場合はほぼその小丘のみが墓所にあてられ、「四十年代」の場合はそれととりまく広い範囲が墓域に入ることになるのである。

新出の真拓オリジナルを紹介された近江氏は、この問題についても考察をめぐらし、結論として「四十年代」説に与された。その根拠は、令前の地積は二〇〇代を一単位としており、「四十年代」のような小さな地積表記はありえないというものだった。しかし、二〇〇代が基本的なまとまりとされているのは事実だとしても、それを細分化した地積はいくらでも考えられるのであり、「四十年代」のような小さな賜地が考えにくいというのならともかく、「四十年代」のような地積表記がありえないと言うことはできない。実際、令前の地積表記を受け継ぐ弘福寺領讃岐国山田郡田図には、「五十束代」や「十束代」といった小さな面積がみえている。また同図には、町段歩制に直すと端数を生じてしまう「九十束代」「七十束代」といった地積もみられるので、

〇・八段という端数になることが「四十年代」のリアリティを削ぐと言ふこともできない。近江氏のように代制の地積表記そのものを根拠にして「四十年代」説を退けることはできないと思う。

逆に、『古京遺文注釈』（小林賢章氏執筆）では、形浦山を中心として八町の墓域を設定すれば、形浦山よりも高大な近隣の山を必ず墓域のなかに含むことになるのに、形浦山のような小丘の名を墓碑に刻みこむのはおかしい、という根拠から「四十年代」説が退けられている。しかし、形浦山に中心的な埋葬施設が築かれていて、周囲の山々はあくまでもその付属地だと認識されていたとすれば、「四十年代」の墓域に高大な山を含みながら形浦山の名前が墓碑に刻まれるというのも何ら不思議なことではない。自然の立地環境に着目した『古京遺文注釈』の論拠も十分なものとは言えないだろう。

こうして「四十年代」か「四十年代」かを決めるためには、これまでとは別の論拠が必要になってくるわけであるが、ここでは直大貳クラスの官人に八町の兆域をもつ墓所が与えられることのリアリティ、あるいは当碑が建てられた河内国石川郡の磯長谷に八町の兆域が設定されることのリアリティについて検証してみることしよう。『延喜諸陵寮式』の記載によれば、陵墓の兆域には、天智天皇陵の「東西一四町×南北一四町」「一九六町」のような広大なものから、安閑天皇陵の「東西一町×南北一町五段」「一町五段」程度の狭隘なものまでかなりのバラつきが認められるが、大体「二町×二町」「四町」から「五町×五町」「二五町」といったところが標準的な面積であり、八町の兆域といえは陵墓とくらべても何ら遜色のない広さであると言える。さらに、『延喜式』のなかから当碑が建てられた磯長谷にある陵墓ばかりを抜き出してくらべてみると、この八町という兆域の広大さは一層きわだ

つように思われる。

敏達天皇	河内磯長中尾陵	東西三町×南北三町〓九町
用明天皇	河内磯長原陵	東西二町×南北三町〓六町
推古天皇	磯長山田陵	東西二町×南北二町〓四町
孝德天皇	大坂磯長陵	東西五町×南北五町〓二五町
聖德太子	磯長墓	東西三町×南北二町〓六町

このうち敏達陵と用明陵は、『扶桑略記』ではそれぞれ「方二町」「方三町」とされているが、いずれにせよ、磯長谷における八町という兆域が陵墓のそれに匹敵する広さであることは確かであろう。「王陵の谷」と俗称される磯長谷に直大貳クラスの官人が八町の墓所をもつという話は、七世紀中葉以前と七世紀末という時期的な違いをさし引いても、いささか現実味に欠けるように思われるのである。

しかも、この磯長谷には陵墓のほかには律令官人たちの墓も営まれていた。それを具体的に示するのが高屋枚人墓誌と紀吉継墓誌である。前者は聖德太子の磯長墓付近の丘陵から発見されたと伝えられ、後者はかつて采女氏塋域碑が置かれていた妙見寺の裏山から出土したと言われている。高屋枚人墓誌は宝龜七（七七六）年、紀吉継墓誌は延暦三（七八四）年のもので塋域碑とは一世紀ちかくの開きがあるが、磯長谷が古くから律令官人の墓地密集地という性格をもっていたことはおそらく間違いないと思われる。こうした点からも、磯長谷において一官人の墓所が八町もの兆域を占めるというのは考えにくい。とくに紀吉継墓誌が出土した地点は、形浦山を中心にして八町の兆域をとれば完全にその兆域内に入ってしまう場所であり、かりに竹良の墓所が八世紀末まできちんと認知されていたとすると、紀吉継の墓所はまったくそれと重複してしまうのである。

このように、陵墓の兆域との比較や、磯長谷の墓地密集地としての性格からすれば、竹良の墓所は「四千代」ではなく「四十代」であると考えた方がよいと思う。真拓の觀察結果とあわせて、本稿では「四十代」説をとっておきたい。結論として、采女氏塋域碑は竹良個人の四十代の墓所を標示して、そこへの立ち入りを禁制するための墓碑であつたと考えられるのである。

### 三 采女氏塋域碑の史料的意义

采女氏塋域碑が以上のようなのだとすれば、それは七〜八世紀の墓制や土地制度のなかにどのように位置づけられるだろうか。まず、墓制については、当碑の建てられた場所と采女氏の本拠地との関係が問題になる。当時における貴族・豪族の墓地経営の特徴のひとつは、たとえば氏寺に付属するようなかたちで、それぞれの本地に集合的に墓地が営まれるということだった。具体的には、『日本後紀』延暦十八（七九九）年三月丁巳条に、

葛井、船、津三氏墓地、在河内国丹比郡野中寺以南。名曰「寺山」。子孫相守、累世不侵。

という記事があり、船氏の氏寺である野中寺近辺に、同じ王辰爾の後裔を名のる葛井氏・津氏とあわせた三氏の墓地が、寺山として確保されていたことがわかる。また、同じく『日本後紀』延暦十八年二月乙未条の和氣清麻呂薨伝には、

高祖父佐浪良、曾祖父浪伎良、祖宿奈、父乎麻呂、墳墓在本郷一者。

と記されていて、備前国藤野郡の本拠地に和氣氏代々の墳墓が営まれ

ていたことがわかる。

采女氏にもおそらくそのような本拠地の集合的な墓地があったと推測されるが、采女氏の分布や磯長谷の性格からすると、塋域碑が建てられた場所はそういう類の土地ではなかったと考えられる。采女朝臣・采女臣氏は、京・摂津国・和泉国などに分布していたことが知られるのみで、その本拠地が河内国石川郡にあったという徴証はない。

『日本書紀』持統五（六九一）年八月辛亥条によれば、詔を受けて「祖等墓記」を上進した十八氏のなかに采女氏も含まれており、その「墓記」にはおそらく本拠地にある祖墓とならんで竹良の墓も記載されていたと思われるが、同じ采女氏の墓でも竹良の墓は、昔からの本拠地とは別のところに営まれたものだったと考えられるのである。それはちようど、船王後（一家）の墓が丹比郡の本拠地から離れた安宿郡の松岳山に営まれたことや、和氣清麻呂の墓が備前国の本拠地から離れて神護寺に造られたこととパラレルな関係にあるだろう。朝廷に出仕した官人とその氏の本拠地との関係を考えるうえで、采女氏塋域碑は墓誌・骨蔵器とならぶ重要史料であると言えるのである。

また、同碑は土地制度とのかかわりにおいても言及されることの多い史料である。たとえば、岡田清子氏は「請造」という表現に土地公有制との関連性を見出し、当碑を土地公有制の進展に対する貴族官人からのリアクションのあらわれとして位置づけられた。東野治之氏は、そうした見方をさらに前進させ、持統三年の浄御原令の施行と、それにもなう班田収授の実施との関連で当碑の造立意図をとらえられた（飛鳥資料館編『日本古代の墓誌』）。このように律令制的な土地支配の創始期に建てられた采女氏塋域碑は、八世紀以後の国家的土地政策とのつながりにおいて考察されるとき、とりわけ重要な意味をもって

くる。なかでも山林原野の公私共利政策は、墓地の林に関係しているという点で、当碑の内容に直接かわつてくる政策である。

慶雲三（七〇六）年三月十四日詔（『類聚三代格』巻十六）は、山野における公私共利原則の遵守を命じたあと、

但氏々祖墓及百姓宅辺、栽樹為林、并周二三十許歩、不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>禁限<sub>一</sub>。

と述べて、周二（一三〇歩）（約三六―五四メートル）の範囲にかぎり、「氏々祖墓」の林を所有することを認めている。これは『続日本紀』延暦三（七八四）年十二月庚辰条の「其諸氏冢墓者、一依<sub>二</sub>旧界<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>斫損<sub>一</sub>」という記事につながる政策であり、律令国家が八世紀のあいだ一貫して「氏々祖墓」の林の所有を認める方針をとっていたことがわかる。ここで重要なのは、墓林の範囲が正味の墳丘にともなう程度に限定され、広大な兆域のなかに山野を囲いこむことができなくなっていることである。これはまさに、竹良の墓所が「四十代」のなかに収まり、その墳丘上の木と若干の傍地だけが保護されていることに通じる状況である。逆に、八世紀以降の公私共利政策との関連性において塋域碑をとらえるならば、竹良の墓所は「四十代」でなければならぬとも言えるだろう。

さらに、もうひとつ重要なのは、「氏々祖墓」に個別的に林の所有が認められるだけで、「祖墓」を包みこむような氏産的な山野所有や、氏全体のための広大な墓域の確保は許されていないことである。さきに船・葛井・津三氏の墓地が、氏寺に付属する「寺山」というかたちで確保されているのを見たが、似たような山野の囲いこみは額田部氏や宗岳氏（石川氏）にもみられる。額田寺伽藍並条里図によれば、額田部氏の氏寺である額田寺の「寺岡」は、「額田部宿祢先祖」と注記

された「船墓」(Ⅱ氏々祖墓)を含むいくつかの墳墓を包みこむかたちで、一九町以上にわたって広がっていた。また、寛平六(八九四)

年の河内国龍泉寺氏人等請文案(『平安遺文』補二五七号)や、元慶

七(八八三)年の河内国観心寺縁起資財帳(『同』一七四号)などに

よれば、宗岳氏の氏寺である龍泉寺は、「龍泉寺山」と呼ばれる三〇

〇町の山を寺辺にもついていたが、その山にあたる現在の富田林市嶽山

(タケヤマ)からは古代の骨蔵器が発見されており、「龍泉寺山」が宗

岳氏の墓山として機能していたことをうかがわせる(中村浩「大阪府

富田林市竜泉出土の蔵骨器について」、『考古学雑誌』五五―三、一九

七〇年)。これらの「寺岡」や「寺山」の所有は、氏寺の所領に転化

しているからこそ認められたのであり、おそらくただの氏産というか

たちでは、そのような山野の所有を認めないのが公私共利政策の原則

だったと思われる。律令国家は貴族・豪族はその山野を氏寺の所領に転

化して収公しようとし、逆に貴族・豪族はその山野を氏寺の所領に転

化して氏産を維持しようとしたと言えるだろう。「拱樹成林」とい

う状態だった和気氏代々の墳墓が、「清麻呂被<sub>レ</sub>竄之日、為<sub>三</sub>人所<sub>二</sub>伐

除<sub>一</sub>」つたことからわかるように、「氏々祖墓」は本拠地における

諸氏の権威とじかに結びついていた。律令国家は、そのような「祖墓」

を保護して諸氏の権威を守りながら、一方で氏産の山野を収公して諸

氏の勢力を削ぐとしたのである。采女氏の「祖墓」のひとつと思わ

れる墓所に建てられた采女氏塋域碑も、このような国家の指向との関

連でとらえなおすとき、また新たな史料の意義を生み出すだろう。

采女氏塋域碑は、わずか五〇字の碑文が刻まれた、ほんの五〇セン

チばかりの小さな墓碑にすぎない。しかし、そこには墓制や氏族制や

土地制度にかかわる、大きな史料的可能性が秘められていると考えら

れるのである。

おわりに

本稿では、近年の真拓の出現に刺激されて采女氏塋域碑の碑文を再検討するとともに、その史料の意義についても簡単な考察をめぐらしてみた。東京大学日本史学研究室では、昨年度から研究室に所蔵されている金石文の拓本を整理しているが、今回現物のない采女氏塋域碑をあつかったことで、あらためて拓本のありがたさを思い知らされた気がする。

#### 参考文献

(江戸時代のもの)

秋里籬島『河内名所図会』(東京大学総合図書館所蔵本)

狩谷棧斎『古京遺文』(勉誠社文庫)

藤貞幹『好古小録』(『日本随筆大成』一期二)

『六種図考』(東京大学総合図書館所蔵本)

松崎謙堂『大和訪古誌』(『芸苑叢書』一期)

山元隠倫『尚古年表』(『芸苑叢書』二期)

(明治時代以降のもの)

飛鳥資料館編『日本古代の墓誌』(同朋舎、一九七九年)

近江昌司『采女氏塋域碑について』(『日本歴史』四三二、一九八四年)

『大阪府史 第二巻・古代編Ⅱ』(大阪府、一九九〇年)

岡崎敬『日本の古代金石文』(『古代の日本 第九巻・研究資料』、角川書店、一九七一年)

岡田清子『喪葬制と仏教の影響』(『日本の考古学 V・古墳時代(下)』、

河出書房新社、一九六六年)

岡野慶隆「奈良時代における氏墓の成立と実態」(『古代研究』一六、一九七八年)

木崎愛吉『大日本金石史 第四卷(撰河泉金石文)』(歴史図書社、一九七二年)

北康宏「律令国家陵墓制度の基礎的研究」(『史林』七九―四、一九九六年) 行雲龍『日本金石志』(『遊暦日本図経』一三三)

齋藤忠編著『古代朝鮮・日本金石文資料集成』(吉川弘文館、一九八三年) 上代文獻を読む会『古京遺文注釈』(桜楓社、一九八九年)

『書道全集』九(平凡社、一九三〇年)

竹内理三『寧楽遺文 下巻』

福山敏男「古碑」(『新版考古学講座 第七卷・有史文化(下)』、雄山閣出版、一九七〇年)

『藤江家旧蔵小杉文庫名品抄』(静岡県立美術館、一九八八年)

藤澤一夫「墳墓と墓誌」(『日本考古学講座 第六卷・歴史時代・古代』、

河出書房、一九五六年)

森浩一「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地」(森編『論集終末期古墳』、塙書房、一九七三年)

藪田嘉一郎『日本上代金石叢考』(河原書店、一九四九年)